



[原著]

看護大学生の自己効力感と精神健康度の関連 A 大学での調査をもとに

五十嵐貴大¹⁾、長尾嘉子²⁾

1)日本医療科学大学 保健医療学部 看護学科、2)常葉大学 健康科学部 看護学科

要旨

本研究の目的は、看護大学生の自己効力感と精神健康度との関連を明らかにすることである。看護系大学1校に在籍する4年生89名を対象に「一般性セルフ・エフィカシー尺度」、「日本語版GHQ12」を用い、自己効力感と精神健康度について質問紙調査を行い、74名(回収率83%)から回答を得て分析を行った。その結果、自己効力感のセルフ・エフィカシー標準化得点と精神健康度のGHQ-12合計点が負の相関を示すことが明らかとなった。

キーワード：看護大学生、自己効力感、精神健康度

1. 序論

看護基礎教育課程に在籍する看護大学生の多くが青年期にあり、心理・社会的発達段階と危機として、「同一性達成対同一性拡散」を持つ(1)。そのため、看護大学生は自己の内部を鋭くみつめ、「自分は何者か」、「自分は何者になりたいのか」という答えを見つけようとしている(2)(3)。そして、「看護職が、本当に自分に向いているのだろうか」と悩む場合が多い状況にある(3)。

看護基礎教育課程の中には、看護の対象として自分とは異なる発達段階にある人々を深く理解し、これまで経験したことのない人間の生病老死にかかわる問題に直面し、その人の生活に深くかかわる側面に対し援助するという学習課題がある(2)。その中で青年期にある看護大学生にとって、自己の未熟さを自覚することは、同一性達成の危機に連動するため、退学してしまったり、看護職になることを辞めてしまったりすることが考えられる。しかし、自ら実施できるということを自覚すれば同一性達成に連

動し、自己にとっての看護職であることの意味という答えに近づくと考える。

Bandura,A(1977)は、行動の先行要因として、自ら実施できるという確信について自己効力感(Self-efficacy)と概念化した(4)。自己効力感は、個人がいかに多くの努力を払おうとするか、あるいは嫌悪的な状況にいかに長く耐えることができるかを決定する要因となり、高いほど行動を遂行ができるという目安となっている(5)。したがって、看護大学生の自己効力感が高まれば、学習が遂行しやすくなると考える。

Bandura, A(1997)は、自己効力感の認識に影響を与える情報源の1つに課題を遂行したときに、生理的・感情的に良好な反応がおり、それを自覚することである生理的・情動的喚起を挙げている(4)。生理的・情動的喚起とは、身体的・精神的変化を指すため(6)、不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向等を要素とする精神健康度と自己効力感が関連すると考える。

先行研究では、看護大学生の自己効力感と精神健康度の関連性について研究をした

所属研究室住所：五十嵐貴大

〒350-0435 埼玉県入間郡毛呂山町下川原 1276

日本医療科学大学

E-mail: t-igarashi@nims.ac.jp

2020年10月16日受付
2020年11月9日受理

ものはない。

そこで、本研究では、看護大学生の自己効力感と精神健康度との関連を明らかにするための調査を行った。

II. 目的

看護系大学1校における調査から、看護大学生の自己効力感と精神健康度との関連を考察する。

III. 方法

1. 対象と方法

対象は、看護系大学1校に在籍する4年生89名に配布し、無記名による回答を依頼した。回収された74名を分析対象とした(回収率83%)。調査時期は2017年2月21日から3月31日であった。

2. データ収集の手続き

便宜的抽出法によって抽出した看護系大学1校の看護学科長に対し、文章にて研究の目的と意義、方法、参加方法、参加に伴う利益・不利益に関する倫理的配慮を提示し、研究協力を依頼し、看護学科長から承諾書に承諾の署名を得た。

対象者に対しては、研究者が、目的と意義、方法、参加方法、自由意志に基づき研究協力の諾否を決定できること、匿名で行うこと、研究に参加しなくても成績に影響しないことに関する倫理的配慮を明記した本研究の説明書、質問紙と返信用封筒を配布し、説明した。回答後の質問紙の回収箱への個別投函により、研究参加への意思を示すよう依頼した。

3. 質問項目

1) 個人属性

性別、年齢を尋ねた。

2) 自己効力感

「一般性セルフ・エフィカシー(以下、GSES)尺度」を使用した。

16の質問項目から構成され、回答は、『はい』または『いいえ』の2件法で、得点範囲は0~16点である。高得点者ほど自己効力感が高いことになる。

採点方法は、GSES採点シートを基に各項目0~1点として合計得点を算出し、合計得点をGSES標準化得点算出表(学生版)

に照らし合わせ、標準化得点に変換した。

3) 精神健康度

General Health Questionnaire (GHQ)の日本語版を短縮させた尺度である「日本語版GHQ-12」を使用した。

GHQは、GHQ28、GHQ30、GHQ12等がある。その中でGHQ12はGHQ60の約3分の1程度の精度であるが、項目数が5分の1であり、5分程度で実施でき、測定効率のよい尺度であることから採用した(7)。

12の質問項目から構成されている。回答は、4件法であり、得点範囲は0~12点である。高得点者ほど精神健康度が低いことになる(7)。

採点方法は、4種類の選択肢のうち、左2つを選択したものについては0点、右2つを選択したものについては1点を与え、その合計得点を求めた(GHQ採点法)(7)。

4. 分析方法

統計解析ソフトIBM SPSS Statistics 26を用いて、解析を行った。

自己効力感と精神健康度の関連性をSpearmanの順位相関係数による検定(有意水準5%)を用いて調べた。

5. 倫理的配慮

研究への参加は自由意思に基づいて決定できること、途中で中断可能なこと、研究への協力の可否は成績とは一切関係なく、研究参加への拒否によりいかなる不当な扱いも受けないことを説明した。匿名性と秘密保持に関する権利を保障するためデータの記号化を行い、情報保護を徹底した。学会への発表及び論文投稿を行うことについても説明を行った。本研究は、国際医療福祉大学倫理委員会の承認(承認番号:16-Ig-120)を得て実施した。

IV. 結果

研究対象者89名のうち、74名から回答を得た(回収率83%)。

1. 対象者の属性

対象者の平均年齢は、 22.1 ± 0.83 歳であった。性別は、男性20名(27.0%)、女性54名(73.0%)であった。

表 1. 自己効力感と精神健康度の相関関係

N=74

項目	セルフ・エフィカシー標準化得点	GHQ-12合計点
セルフ・エフィカシー標準化得点		-.379**
GHQ-12 合計点	-.379**	

Spearman の順位相関係数

** $p < 0.01$

2. 自己効力感と精神健康度の関連性 (表 1)

自己効力感の標準化得点と精神健康度の合計得点 ($r = -0.38, p < 0.01$) に有意な相関がみられ、自己効力感が高いほど精神健康度も高いという結果であった。

と各尺度との関連や本研究の信頼性を高める必要がある。

謝辞

本研究に協力して頂いた学生の皆様に心より感謝いたします。

V. 考察

自己効力感の標準化得点と精神健康度の合計得点は弱い負の相関を示していた。これは、精神健康度が高いほど、自己効力感が高くなることが考えられ、精神健康度の要素である不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向等に注目することが重要である。このことから、日々の精神面の健康管理行動をとることが自己効力感を高めることに寄与することを示唆している。

青年期にある看護大学生は、看護学を学修しながら将来を展望し、「看護職が、本当に自分に向いているのだろうか」と悩む時期である (3)。このような時期は、精神的に急激な変化や成熟がみられるため、より注意深く精神面の健康管理に着目し、精神健康を保つことによって自己効力感を高め、授業に対する学習意欲を高めていくことが重要であると考えられる。

VI. 結論

看護大学生の自己効力感と精神健康度の関連性が確認され、自己効力感と精神健康度に弱い負の相関があった。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は看護系大学 1 校に在籍する 4 年生を対象としていることから、今後はさらに対象とする大学を増やし、対象者の属性

引用文献

- (1) E.H.エリクソン. 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房, 1987, p.111-118.
- (2) 杉森みど里, 舟島なをみ. 看護教育学. 医学書院, 2016, p. 261-262
- (3) 小立鉦彦. 看護教育学. 南江堂, 2015, p. 94-105
- (4) Bandura,A. Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review. 1977, Vol.84, p.191-215
- (5) 坂野雄二, 東條光彦. 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究, 1986, 12 (1), p. 73-82.
- (6) 前場康介. 大学生の進路選択セルフ・エフィカシーにおける強化要因についての概観. 跡見学園女子大学文学部紀要, 2018, 53, p. 89-99
- (7) 中川泰彬, 大坊郁夫. 日本語版 GHQ 精神健康調査票手引 (増補版). 日本文化科学社, 2013, p. 69-80.

Relationship between self-efficacy and mental health in nursing university students in University A

Takahiro Igarashi¹⁾, Nagao Yoshiko²⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Nihon Institute of Medical Science,

2) Faculty of Health Science, Tokoha University

Summary

This study aimed to clarify the relationship between self-efficacy and mental health in nursing university students. The general self-efficacy scale and the Japanese version of the General Health Questionnaire (GHQ12) were used to assess levels of self-efficacy and mental health in a questionnaire survey of 89 fourth-year students at a single nursing university. Responses obtained from 74 students (recovery rate: 83%) were analyzed. The results revealed a negative correlation between the self-efficacy and mental health levels that were measured with the standardized self-efficacy score and the total GHQ-12 score.

Keywords: nursing university students, self-efficacy, mental health